「コココーラ」（２０２３年７月 上演台本）

作・荒悠平

広い公園。
遊具とベンチがある（遊具はやや後方、やや下手寄りに、ベンチは後方上手寄りに置いてある）。
ベンチの横（上手側）にはスーツケース。
五月の中旬、平日の昼間。
陽の当たる場所に居ると気持ちが良いと感じるような気候。

そこに五十代半ばの男女がふたり居る。
女性（琴子）は舞台中央、やや上手に少し体を開いて立っている。
男性（守）は琴子と向かい合っていて、しかし琴子より舞台中央からの距離は遠い。箱を持っている仕草で、慎重に歩いている。

守　（ない箱を見てそっと歩きながら）こう、このくらいの、箱を、箱をね、運んでいるわけよ。中身は、水？　なのかな？　見ると、液体で満たされていて、こぼさないように、こう、僕は慎重に箱を運んで、渡すの。

琴子　わたしに？

守　そう。（琴子、箱を受け取ろうと一歩踏み出す）いや、ちがうな。（琴子、足を止める）いや、ちがわないか。うん。

守、舞台中央まで歩いてきて、琴子に箱を手渡す。
琴子は戸惑いつつ箱を受け取る。

守　で、渡すと、大きくなって、

琴子　わたしが？

守　いや、箱が、

琴子　（言われたことを反復することで意味を飲み込むように）箱が、大きくなる。

琴子、箱を抱えた手をゆっくりと広げ始める。
両手を広げながら（これで動作が合ってるかな？）というように守を見る。

守　じわじわーっと、でも、目に見えて大きくなるのね。

琴子　それは、中身も？

守　中身も。増える。

琴子　え、重いの？

守　うん、

琴子　（箱を持つ仕草に重さの演技が加わる）重い。

守　重いと思って、僕も渡したばかりだけど、一緒に持つのよ。

守、大きくなった箱を琴子と一緒に持つ格好になる。
ふたりは箱の大きさに押されてじりじりと離れながら話す。
箱をはさんで、少し焦りながらの会話なので、声はだんだん大きくなる。

琴子　箱を？
守　箱を。箱をね、一緒に持って、でも箱はどんどん大きくなって、
琴子　でも、落とさないのね？
守　僕たち、意外と力持ちで、
琴子　とはいえ、限度がある！　もうこんなに大きいと、守くん見えないよ！（と、見えない箱のせいで箱の向こうの守が見えない、というような首の動き）
守　うん！　と思ってたら、箱の大きくなるのが、止まって、だから、一旦置こうか。
琴子　うん。

ふたり、慎重に箱を置く。「うーーーー」

守　ふう。
琴子　ふう。
守　っていう夢をね、
琴子　見たんだ？
守　いや、
琴子　え？
守　見たいな、と思って。
琴子　ん？
守　そんな夢を見たい。

ふたり、見つめ合う。
守、なぜかとても満足げ。

琴子　え？　何この話。
守　箱を持ってる、っていう夢はね、水の入った、このくらいの箱を運んでいるっていう夢はね、実際に見るのよ。よく見るんだよ。
琴子　はあ。
守　でも、その、
琴子　うん、
守　発展性はなくてさ、いつも同じことの繰り返しで、何かエキサイティングなことが起きないかなあ、って。
琴子　いいじゃない、べつに。え？　嫌な夢とか？
守　ん？
琴子　嫌な夢なの？
守　いや、嫌な夢とかでは（ない）。
琴子　じゃあいいんじゃない？　ほどけそうだよ。
守　だから、まあ、うん。いいんだけど。え？

琴子は守の左足を指差す。

守　（見下ろして左足の靴紐がほどけそうなことに気づき）あ。
琴子　え、目覚めるんでしょ？（※めざめる、でなく、めさめる、と読む）
守　（顔を上げて）え？
琴子　目覚めるのよね、その、箱を渡したり、置いたりしたら、

守　する前。
琴子　え？
守　箱、を、あの、箱を渡したり置いたりする前に、目、覚めちゃう（もう一度自分の足下を見る）。
琴子　あ、そっか。
守　うん。
琴子　へえ。

琴子、その場で六歩くらいかけて自転し、ため息をつく（鳥の鳴き声が聞こえたから探した。でも見つからない）。それから近くにあるベンチまで歩いて、ベンチの座面をかるく手でさわって確認、腰を下ろす。
守は靴紐を結ばずに、仁王立ちで腕を組み立ち直して左右の足を見較べる。

守　（靴紐が片方だけほどけそうになっていることに首を傾げ）なんでかなあ。
琴子　何かきっかけあるの？
守　何の？
琴子　目が覚める・・・
守　ああ、きっかけは、ないよ、なんか、ほら、
琴子　ん？
守　気づいたら、うん、気づいたら（顔を上げて）覚めてるね。
琴子　え、何もないの？
守　何もないから、展開がほしいって話をさ、
琴子　あ、そうか。
守　なんか、箱をさ、よくわかんないけど持ってるだけで、でも夢の中ではよくわかんないとか思わずに、たーだ持ってるんだよね（と、言いながらまた足下を見る）。

守、腕をほどいて、右足をブンブン振る。それから右足を見る。今度は右足だけ地団駄踏む。また右足を見る。右足だけツイストする。
動きながら「ほ、ほ、」などと、息とも声ともとれるような音が口から漏れる。

琴子　（守の様子を見て）ふふふ、
守　うーん、
琴子　何してるの？
守　全然ほどけない。
琴子　靴紐？
守　そう。右の靴紐。
琴子　そんな簡単にほどけたら困っちゃう。
守　でも、左はほどけるんだよね。自然に、最近、
琴子　それで右もほどこうとしてるの？
守　いや、ほどけても困るんだけど（もう一回右足を振る）、

ふたりとも振りやめた足下を見る。顔を上げ、目を合わせる。

守　全然ほどけない。
琴子　ほどこうとしてないで結びなよ。

守　そうだね。

守、今度は左足を振ってみる。

守　(振った足を見下ろしながら)こっちはほどけかけてたけど、いざ、ほどいちまえと振ってみると・・・(ほどけないもんだね、と琴子に見せる)

琴子　(黙って頷く)

守、琴子のところまで歩いて、琴子の隣に腰を下ろす。
琴子は守が近づくのを見ていて、座るタイミングで目を逸らす。
守は左の靴紐を結び直す。

守　なーんか、特に意味もないんだろうけどさ、けっこう長いこと見るんだ、箱の夢。
琴子　あ、この話まだ続くんだ？
守　え、
琴子　え？
守　え、つまんない？
琴子　つまんないとは言わないけど、
守　いや、あの、正直に(言って)いいよ。
琴子　つまんない。
守　おあ、
琴子　嘘だよ。
守　へ、
琴子　嘘だよ。
守　ほんとに？
琴子　嘘だよ。
守　嘘なのかー。
琴子　ん？　あ、ちがう、本当に嘘だよってこと。
守　ん？　それって、ん？　結局どっちだ？
琴子　えーと、つまんないっていうのが、嘘。
守　えーと、つまり面白いのか。
琴子　いや、面白いとは言ってないけど、
守　え、どっち？
琴子　つまんなくはないって言っただけで、
守　じゃあ、面白いってことでいいですか？
琴子　うん。べつにすごく面白くもないけど、それで？
守　ん？
琴子　いや、だから、その、続き。んー、話の、
守　なんだっけ？
琴子　なんだったっけ？

ふたりとも少し笑う。

守　あ、あの、昔から見るんだ、この夢。そうだ。
琴子　ああ、

守　何の夢なんだろうね。
琴子　何の夢でもないんじゃない？
守　え？　そういうこともあるの？　夢ってだいたい意味とかあるって言うでしょ。夢診断とか、
琴子　そんな大層なものじゃないでしょ。
守　（笑って）人の夢を、琴子さん、そんな、
琴子　（つられて笑って）ごめんごめん、
守　こりゃ罰ゲームかな、
琴子　えー（と嫌がって立ち上がって守と距離をとる）。
守　（何か変な提案）
琴子　（何か変な提案に対しての応答）
守　（笑って）琴子さんはさ、ないの？　そういう、よく見る夢とか。

琴子、（わたし？）と声を出さずに自分を指差し、考えるようにうろうろする。

琴子　あ、この前、
守　うん、
琴子　この間、友達の家に行ったんだけどね、
守　うん。
琴子　猫を飼ってるのね。
守　猫。
琴子　母猫一匹、子猫一匹、
守　え、一匹？
琴子　なんか、もともと少なくて、難産でね、死んじゃったりして、
守　あー、
琴子　お母さん猫が、あの、なんか、ぽけーっとした子でさ、でも、なんか、来客があるとあわてて子猫を隠すんだって、
守　なんで・・・
琴子　わかんないけど、守ろうとしてるんじゃない？
守　そうなの？　何から？
琴子　何から？
守　え、何かから守ろうとしてるんじゃないの？
琴子　わかんないよ。
守　そっか。
琴子　何から守ろうとしてるんだろうね。わかんないけど。でも、その、ぽけーっとした子だからさ、
守　んー、
琴子　あの、
守　ちょっと待って、
琴子　え？
守　それ夢？
琴子　ん？
守　これ夢の話？
琴子　え？　ちがうよ？
守　だよね。
琴子　うん。
守　夢の話ってお題だったのに、

琴子　あ、夢の話じゃなくてもいいかなって思って、
守　そう・・・
琴子　あ、やめとく？この話、
守　いや、聞くけど、ここまで聞いたから、
琴子　いいの？
守　あはは（頷く）
琴子　子猫、隠すじゃない？　親猫がさ、あ、名前、クロちゃんっていうんだけど、
守　うん、
琴子　クロちゃん忘れちゃうんだって。どこに隠したか。
守　え。
琴子　それで、友達も一緒に、いつも家中探し回る羽目になるって、
守　それは、子猫からしたら迷惑な話だなあ。
琴子　そうかな。
守　そうじゃない？
琴子　わかんないけど、
守　わかんないのか。
琴子　うん。
守　え、これ何の話？
琴子　え、夢の話じゃないの？
守　え、夢の話じゃないんでしょ？
琴子　うん。あ、そっか。
守　うん。
琴子　（怪訝そうに）え・・・これ・・・何の話？
守　（呆れて「こっちが聞いてるんだよ」と言いそうになるが、やめて、嬉しそうに）何の話なんだろうねえ。
琴子　あー。うん。（見上げて、視線を戻して、何故か晴れ晴れと）わかんなくなっちゃった。

琴子、守の横に戻り、守の横に座る。
守はその様子を見ていて、座る直前に目を逸らし、座ってからまた琴子を見る。

守　まあいいか。
琴子　うん、いいよ。
守　なんか、でも、あれだなー。
琴子　何？
守　何かいいことないかなあ。
琴子　えー。
守　夢の中でもいいからさ！

琴子、守を見て首を傾げる。

琴子　そんな、毎日に疲れてうんざりしちゃった会社員みたいな、
守　毎日に疲れてうんざりしちゃった会社員だよ。まさに。
琴子　うーん、かわり映えのない日々を送る夫婦みたいな、

守、琴子を見て、首を傾げる。

守　かわり映えがありすぎてさ。

守、目を逸らし、次いで琴子も目を逸らす。

琴子　あー、うん。
守　そうだよ。
琴子　（モゴモゴと）そうだよね。（さらにモゴモゴと）ごめーん。

琴子、立ち上がる。

守　いや、こっちこそ、（モゴモゴと）いつも呼び出してごめん。
琴子　え？
守　いつも呼び出しちゃってごめんね。
琴子　カナコさんのとこ早く行ってあげなよ。
守　そうなんだけどさ、
琴子　何が？
守　早く行けばいいんだけどね、あーあ、悲しくて、悲しくて、とても、
琴子　お、
守　ヤリイカ食べたい。
琴子　ヤリイカ、
守　日本酒と、
琴子　（座りながら、ヤリイカと日本酒を想像して）いいね。
守　くだらないことばっかり言ってますが、
琴子　行きたくないの？
守　行きたくないわけじゃないよ。
琴子　こわいの？
守　何が？

琴子、ただ黙って守を見る。

守　あー、これ、こわいのか、おれ。（言った後でちょっと納得がいかずに）おれ、こわいのか？
琴子　気持ちはわからなくもないけど、
守　こわいっていうか、どうしたらいいかわかんないよ。

守、座ったまま深呼吸。物足りなかった様子で、立ち上がってもう一度深呼吸。

守　（歩き出しながら）本当はさ、一秒でも、一秒でも長く一緒にいたいって気持ちの方が本当は本当なんだけど、（数歩歩いては数歩後ろ歩きで戻る。ベンチの位置から緩いカーブを描いて、舞台前面を真横に歩く軌道までを往復する）
琴子　・・・あれ、泣きますか？
守　泣きませんよ。
琴子　そうですか。
守　僕、七歳のときから泣いたことないのよ。
琴子　七歳？　七歳ってあの七歳？

守　どの七歳かわかんないけど、たぶんその七歳。
琴子　へー。七歳。
守　でも、今は、その気になれば、一分くらいあれば、泣きそう。
琴子　やっぱり泣くんじゃない。
守　その気になれば、ね。今はその気じゃないから。
琴子　「その気になれば」って言ってる奴がその気になった試しはないんだよ。
守　え、怒られた？
琴子　（その気になれば泣けるという言葉に遅れて反応して）ふうん。

守、立ち止まる。

守　上の娘はさ、
琴子　エミちゃん？
守　うん、エミはさ、
琴子　うん、

守、振り返って後ろ向きで数歩歩く。

守　五歳のときから泣いたことなくってね。
琴子　守くん、負けてんじゃん。
守　いや、勝ち負けじゃないでしょう。
琴子　でも、負けは負け・・・
守　勝ち負けじゃないからさ（立ち止まる）。
琴子　どんまい。

守、どんまいと言われたことに納得がいかず、身体の向きを変え、でも一歩も歩き出さずにまた向きを変えて元の向きに戻る。

琴子　でも、じゃあ、つらいね。
守　エミ？
琴子　うん。だって、お母さんが、ね、こういうとき、本当は、泣きたいんじゃない？ エミちゃん。

守、何か地面を点検している。

琴子　何してるの？

守、でんぐり返しで寝転がる。

琴子　うわ。
守　泣くって、何だろうね。
琴子　泣いたからって何も変わんないけどね。
守　でもなあ、
琴子　でも？
守　でもなあ、

琴子、ベンチの上に立ち上がり、守の様子を伺う。

琴子　そんなに割り切れるものでもないものねえ。
守　（モゴモゴと何か言う）
琴子　え？
守　割り切れねえですよ。これは、
琴子　そっか。
守　円周率みたいなものですよ。
琴子　ん？
守　円周率！
琴子　うん・・・うん。
守　ごめん、あんまり上手くなかったね。
琴子　えーと、面白かったよ？
守　（笑って）やめて。
琴子　（笑う）
守　え、円周率って割り切れないよね？
琴子　割り切れない、割り切れないよ。
守　そこは合ってたか。
琴子　そこは合ってたよ。
守　はーあ、永遠に割り切れませんよ。
琴子　円周率が？
守　気持ちが。
琴子　でも、再発するかもってわかってたんでしょう？

琴子、ベンチから降りる。

守　わかってはいたけど、
琴子　（ショルダーバッグからハンカチを出し、ベンチの自分が立っていた位置をはたきながら）うん、
守　わかってはいたけどさ、
琴子　わかってたからってどうってことでもないのか（もう一度座る）。
守　うん。

音楽。
照明も、少し変化。
この音楽がかかる時間は一分程度だが、劇中では二十分くらい経っている。
琴子は、水筒から飲み物を飲む。
守は寝っ転がったまま空を見ている。
音楽が終わる。
守、起き上がる。

守　なんか、あれだ。もっと、こう、もう今年も終わりなのかー、みたいな話しよう。
琴子　今年まだ全然終わりじゃないよ？
守　だから、みたいな、だよ。
琴子　ああ、うん。

守、立ち上がり、琴子のほうへ歩く。
ベンチの横にあったスーツケースを開け、ウクレレを取り出す。

琴子　あ。
守　うん。いつも琴子さんのこと呼び出しちゃって、ほんと、あれだよね。
琴子　（ウクレレとちがう話題がきたので、）あれ？
守　お手数おかけしてすみません、的な、

と言いながら、守はチューニングを始める。以下の会話はチューニングが終わるまで、チューニングをしながら続ける。
守はチューニングをしながらベンチの真横ラインを下手側に後ろ向きで歩いて行ったり、戻ってきたりする。

琴子　まあ、こういうときはお互いさまでしょう。それに、わたし、ただ来てるだけだし。
守　今日はね、
琴子　（遮るように）それ何？
守　ウクレレ。
琴子　そのくらいわかるよ。
守　じゃあなんで訊くの？
琴子　だから、なんでウクレレ？
守　それを、説明しようとしてた。今日はね、
琴子　うん。
守　新曲を作ってきたんですよ。
琴子　え、守くん、
守　（決め顔と決めポーズ）
琴子　（無視して）曲とか作るの？
守　あの、はじめて作ったんだけど、
琴子　それは、どういう、あれ？
守　あれ？
琴子　あの、あれ、虫？　風？　吹き回すやつどっちだっけ？
守　風？
琴子　どういう風の吹き回し？
守　いや、あのね、
琴子　ん？
守　カナコに聞いてもらおうと思って、
琴子　おおー。
守　でも、少々びびってまして、
琴子　はあ。
守　リハーサルとして、琴子さんに聞いていただこうかと、

琴子、チューニングの様子を眺める。

琴子　そういうのって、一番最初に聞かせてあげるからいいんじゃないの？
守　え？
琴子　だから、あの、リハーサルとか、やる？

守　リハーサルは必要でしょう。
琴子　わたしはべつにいいけどさ、
守　だめかな？
琴子　だめではないけど。
守　リハーサルって、なんか、猿の種類みたいだね。ニホンザル、メガネザル、リハーサル。
琴子　(全然納得いかずに)え、あ、うん、
守　あれ、何語よ？
琴子　え？
守　リハーサルって何語？　英語？　ドイツ語？
琴子　(考えている)何語だろうね。
守　そういう言葉あるよね。響きだけだと、何語かさっぱりわかんないの。
琴子　たとえば？
守　んー、ブロッコリーとか。
琴子　(ちょっと納得して笑う)ああ、
守　エミが小さい頃、ブロッコリーのことブッコロリーって呼んでたな、そういえば。
琴子　かわいい。
守　(ふと)あれ？　何の話だっけ？
琴子　ほら、肝心なことのほう忘れちゃってるじゃない。何の話だっけ？
守　何の話だっけ？
琴子　リハーサル？
守　ああ、そうだ、リハーサル。聞いてくれる？
琴子　だから、わたしでいいの？
守　聞きたくないならやめておくけど、
琴子　聞きたくない、とか、そういう話ではないんだけどね。
守　聞きたい？
琴子　聞きたいわけでもないけどね。
守　どっちだよ。
琴子　どっちでもないよ。

守、おもむろに立ち上がる。

守　あー緊張する。
琴子　やるんだ。
守　あー。あー。
琴子　(あくび)
守　人前でやる度胸をつけとかないと。まあ、人前であるなら相手は猿でもいいくらいなんだけど、
琴子　人じゃないじゃん。
守　あ、リハー猿前ってこと？
琴子　はいはい。

守、座る。

守　とにかく、
琴子　はあ。

守　練習してきたものを、披露しますね。ふう。あー、あー、
琴子　どうぞ。
守　それでは、
琴子　(当たり前のように)ワン、ツー、スリー、フォー、
守　え？
琴子　え？
守　何故・・・カウントを・・・
琴子　だめ？
守　だめじゃないけど、テンポも何も知らないのに、
琴子　無理があったか。
守　ん、やりたいんなら、やってもいいけど、
琴子　じゃあやろうかな。
守　でも、あの、この曲、三拍子でさ。
琴子　え、
守　三拍子。
琴子　ワンツースリーはい！　ワンツースリーはい！
守　うお、は、速い。速い。
琴子　え。
守　(少し考えて)それけっきょく四拍子だよ。
琴子　え？
守　(説明する)
琴子　(一応納得する)
守　三拍子って何かわかってる？
琴子　あれでしょ。ズンズンチャ、
守　そう。
琴子　ズンズンチャ、ズンズンチャ、ズンズンチャ(途中から足踏みと手拍子始める)、
守　(呆れつつ、嬉しそうに見ている)
琴子　(ノリノリで歌い出す)
守　おーい！
琴子　あっはっは、
守　あとその曲も四拍子。
琴子　え、うそ？
守　(四拍子を説明して)ね？
琴子　ほうー。
守　カウントする気ある？
琴子　(笑って)ない。
守　ないのか。
琴子　初めはあったんだけど、
守　初めはあったのね。
琴子　でも、せっかくだからやる気出すか。よし、それでは、
守　(遮って)ごめん。やっぱ、いいや。カウント。
琴子　・・・まあ、そうだよね。

守、一度立ち上がり、座る。

守　（咳払いをして）♪（何かテンションの上がる歌を歌う）
琴子　えー
守　はっはっはっ、
琴子　（適切な一言）？
守　嘘。嘘。あーあー。（音を確かめて、歌い出す）

避雷針

雨の降る日には雨に濡れる
雲のない日には陽に照らされる
風の吹く日には揺れている
何もない日にはただそこにいる

僕のこと、忘れていいよ
でも、なかったことにはしないでね
僕は君の昔の家の、避雷針

琴子　（拍手）
守　（一礼）
琴子　これ、途中までさ、いい歌かと思って聞いてたら、
守　いい歌じゃなかった？
琴子　いや、いい歌、なんだけど、
守　うん。
琴子　避雷針？
守　うん。
琴子　え、避雷針？
守　うん。避雷針の歌。
琴子　避雷針の歌だとは思わなかったわー。
守　十年くらい前に引っ越した家の、避雷針の妖精が会いにきたっていう、そういう設定の歌なんだけど、
琴子　それは、言われないと、絶対わかんない。
守　そうか。
琴子　そんなにぜんぶ察してもらえると期待しちゃだめだよ？
守　そうか。
琴子　そうだよ。

守、立ち上がり、俯きながらうろつく。

守　でも、カナコなら、
琴子　ん？
守　わかるんじゃないかなあ。
琴子　あー。え、そう？
守　わかんないか。
琴子　うーん、まあ、どうかなあ。わかってもわからなくても、いい歌だからいいんじゃないの？
守　そうか、

琴子　そうだよ。
守　カナコ、聞いてくれるかな。
琴子　聞いてはくれるでしょう。
守　（急に顔を上げ、調子をつけた声で）聞いてくれなかったらすげーショックっすよー。

ふたり、見つめ合う。

琴子　何？　そのノリ、
守　最近、会社の若いのが言うんだよ。すげーショックっすよー。
琴子　あっそう。
守　お、つれないねえ。
琴子　カナコさんの前で、ちゃんとやりなよ？
守　うん。
琴子　まだ行かないの？
守　行くけどさ、
琴子　あっそ、
守　ここで琴子さんとウダウダするために有休取ったわけじゃないのになあ。
琴子　呼び出しといてひどい言い草だなあ。
守　呼び出しといてひどい言い草だよねえ。
琴子　そうだよ。
守　カナコはさ、
琴子　ん？
守　僕と結婚して幸せだったんだろうか。
琴子　・・・
守　・・・
琴子　急だね。
守　そうでもないよ？
琴子　ずっと考えてた？

守、立ったままウクレレを爪弾く。

琴子　訊いてみればいいじゃない。

守、ウクレレを爪引き続ける。

守　訊けないよ。
琴子　・・・あのさ、わたし、三年前に姉が亡くなったじゃない？
守　・・・うん。
琴子　お葬式のときに、急に、気づいて、わかったことがあって、
守　気づいて、わかったこと？
琴子　姉は、舞台俳優だったのよ。話したことあると思うけど。それで、あるとき、ずいぶん、十年以上前だけど、わたしに、「コココーラあるから飲んでいいよ」って言って、わたし、俳優なのに滑舌わるいなあって思って、コココーラって言えてないって思って、意地悪な気持ちで、笑ったことがあったの。
守　うん。

琴子　ずっと、滑舌わるくて、コカコーラをかんじゃってコココーラって言ったんだと思ってたんだけど、たぶん、ちがうね。
守　うん。わたし、名前が琴子だからさ、たまに、あだ名で、姉はわたしのことを、コッコ、って呼んだのね。
琴子　ああ。
守　だから、呼びかけて「コッコ、コーラあるから飲んでいいよ」って言ったのか、
琴子　うん、
守　それか、ここにコーラがあるよ、って意味で「ここコーラあるから飲んでいいよ」って言ったのか、
琴子　うん、
守　その二つの可能性に、お葬式で急に気づいて、でも、どっちだったか、永遠に訊けなくなっちゃった。
琴子　それか、本当に、たーだ、かんだ可能性もね。
守　あはは、うん。たぶん、質問しても覚えてないと思うけど、そんなこと。わたしもずっと忘れてたし、でも、なんか、それに気づいたとき、悲しかったなあ。

守、ウクレレを弾きやめて、琴子の隣に腰を下ろす。

琴子　だから、カナコさんもさ、
守　え？ カナコ？
琴子　うん、だから、ね。一緒にいられるうちにたくさん話した方がいいよ、っていう話。（※たくさんはなした、でなく、たくさんはなしした、と読む）
守　そうか。
琴子　そうだよ。
守　琴子さんも、あれだね。あれ。稀少な人だよね。
琴子　そうかい？
守　そうだよ。
琴子　どうした？ 急に。
守　歳とるじゃない？
琴子　え？
守　歳とるじゃない？ 人間って、
琴子　ああ、うん。
守　三十過ぎたあたりからさ、いよいよ、何もなく、たーだ公園とかで会う友達っていなくなってきたなあ、って印象があって。
琴子　ああ。
守　んー、でも、こういうときはそういう人が必要だなあ。って、
琴子　そういう人？
守　痛みに寄り添うっていうかさ、何だろ。いつもより少しだめなところを見せてもいつも通りでいてくれる人みたいな、
琴子　ふうん。
守　男ってガサツだからさ、特におじさんになってくるとね、こういうとき一緒にいてくれる人って少なくなる気がして、
琴子　それ女の人に会いたい方便なんじゃないの？
守　でも、女の人でもそうじゃない？
琴子　ん？。

守　落ち込んでるとき会うなら、ガサツなおじさんより、優しいおばさんのほうが断然いいでしょ。
琴子　それ、おじさん、おばさんっていうか、ガサツか優しいかの問題でしょ。
守　でも優しいおじさんは少ないんだよ。
琴子　つまり、わたしを優しいおばさんだと、
守　そういうことでもないんだけどね、
琴子　なんか、どう転んでも、失礼だなあ。
守　ガサツなおじさんだからね。
琴子　自覚あるなら直しなよ。
守　ですよね。
琴子　そういうの本当に嫌われるからね。
守　(そう)かなあ。
琴子　まじで、まじで、嫌われるからね。
守　(琴子の迫力に)こわいよ。
琴子　クソ野郎が。
守　(琴子がふざけて怖くしていることに笑ってしまう)
琴子　(つられて笑ってしまう)人に感謝するのだってさ、気持ちだけじゃどうにもならないんだからね。やり方間違えないでください。
守　すみませんでした。
琴子　あーあ。

ふたり、どちらからともなく立ち上がり、ゆっくり円形に歩きながら会話をする。
黙ったまま一周する。

守　同僚の人でさ、僕と同い年くらいなんだけど、部下に大事なこと覚えさせるとき、リピートアフターミーって言ってから復唱させる奴がいてさ、
琴子　うわあ、
守　いやでしょ？
琴子　ちょっとやだ。
琴子　べつに面白くもないし、気遣いとかコミュニケーションにガサツなおじさんって感じで腹立つよ。
守　まあ、でも、その人なりの努力なんじゃないの？
琴子　あいつのこと知らないからそんなこと言えるんだよ。
守　守くんがその人のこと嫌いなだけじゃん。
琴子　いや、なんか、でも、流行っちゃってさ、それが、
守　リピートアフターミー？
琴子　うん、
琴子　え、みんな面白がってるってこと？
守　そうなのよ、
琴子　ならいいじゃない。
守　いいんだけどさ、
琴子　守くんは言わないの？
守　僕は、絶対スーパーものすごく大事なときにしか使わない。
琴子　使うんじゃん。
守　今までに一回だけだよ？
琴子　何のときに使ったの？

守　会社で部下に怒ったんだけどさ、
琴子　うん。
守　食堂のおばちゃんに話しかけるときは敬語をつかうこと。
琴子　・・・
守　「カニクリームコロッケ定食」じゃないんだよ。「カニクリームコロッケ定食ください」だろ。
琴子　・・・うん。
守　大事なことじゃない？
琴子　大事なことだけど、想像したのと少し違った。
守　ほんと腹立つんだよ、海外から日本に来たコンビニの店員とか、食堂のおばちゃんとか、（平たく）言っちゃえばなめられやすい立場じゃない？ そういう立場のひとをなめてる奴、
琴子　ああ、
守　「からあげ棒」じゃないんだよ、「からあげ棒ください」だろ。
琴子　うん。
守　「ピザまん」じゃないんだよ。「ピザまんください」だろ。せっかくこれからピザまん食べるんだからもっと嬉しそうに頼めよ。
琴子　（変な方向に行き始めた守の憤りを無視して）そういうの、なんでだろうね。わたしもなんか、無闇に気安く扱われることあるけど、
守　琴子さんとかは、権力とあんまり縁がなさそうに見えるからじゃない？
琴子　うーん、それだけかなあ。
守　ちがう？
琴子　なんていうか、自分だけが答え知ってるって思ってそうな、
守　答え？
琴子　カニクリームコロッケ。
守　カニクリームコロッケ？
琴子　作り方知ってる？
守　（少し考えて）え、わかんない。（さらに少し考えて）え、あれどうやって形整えてるの？
琴子　（答えずに）べつにカニクリームコロッケの作り方知っててもえらいってわけじゃないけどさ、知らなくても生きていけるし、でも、なんか、知らない方がえらいってわけでもないじゃない？
守　ん？ うん。
琴子　たぶん、わかんないけど、その、「カニクリームコロッケ定食」って言ってるひと、カニクリームコロッケの作り方知らなそうな気がするんだよね。
守　ああ、うん、知らなそう。
琴子　でも、食堂のおばちゃんは、知ってるでしょう、カニクリームコロッケの作り方。
守　知ってるよね、そりゃ、はい。
琴子　なんでカニクリームコロッケについてやりとりしてるのに、カニクリームコロッケの作り方を知らないひとの方がえらそうにしてるの？
守　え、いや、うん、そう、だよね、って思うよ。
琴子　でも学歴とか、あるんだよ。
守　学歴？
琴子　そういうとき、カニクリームコロッケの作り方知らない奴の方が、学歴あるの、大抵は。
守　ああ、（と言いつつ話の流れがつかめない）え？ そう？
琴子　学歴じゃなくても、なんだろ、お金とか、スポーツやってたとか、なんでもいいけどさ、だから、世の中全般的には、なんとなく自分の方が力を持ってて、知識とか、答え？ 知ってるような気になっちゃって、深く考えずにえらそうにしちゃうんだって（わたしは思うんだ）
守　ああ。

琴子　カニクリームコロッケの作り方知らないのにね。
守　(ここまでの話の流れを咀嚼して)そうだね、カニクリームコロッケの前では、カニクリームコロッケの前なりのヒエラルキーが本来はあるはずなのにね。
琴子　やだなあ。
守　でも、そんな複雑なのじゃなくって、
琴子　ん？
守　学歴とか、知識とか、なんか、そういうの、立場とかじゃなくって、誰かが誰かの前でえらそうにするの、変だよ。
琴子　うん。
守　だから、食堂のおばちゃんには敬語つかうんだよ。つかうべき、って思ってて、
琴子　味方だ、守くんは、
守　味方？
琴子　食堂のおばちゃんの、
守　味方っていうか、(言葉を探すのが急にめんどくさくなる)そういうもんでしょう。たーだそういうものなんだよ。
琴子　うん。
守　でも、琴子さんのことは、わりとどうでもいい感じで接しちゃうんだよなあ。
琴子　(ちょっと苛っとする)何なの？ ねえ、
守　友達かな。
琴子　え？
守　友達ですよ。琴子さんは、
琴子　(少し黙った後で)そんなこと言ってごまかさないほうがいいでござる。
守　え？
琴子　耳触りのいいこと言ってごまかすの、いつのまにか身につけた守くんのわるい癖でござる。
守　何？ ござるって。
琴子　(無視して)友達だから何なのでござるか？
守　だから、稀少だなあ、って、
琴子　は？
守　・・・稀少でござるなあ、って、
琴子　稀少だから何でござるか？
守　(笑っちゃって)だから、何よ、ござるって。

琴子、立ち止まる。守は歩き続ける。

琴子　守くんの所感など、どうでもいいでござる。
守　何なのさ。
琴子　わたし、あのね、来たくて来てるんだから、そっちで勝手に何か解釈したり感謝するのやめてくれない？ あ、やめてくれるでござるか？
守　・・・わかったでござる。
琴子　ふーん。
守　カナコ、あんまり、いいニュースなくてさ、
琴子　知ってるでござるよ。
守　そうでござるか。
琴子　いいニュースあったら、守くん言うし、
守　そっか。

琴子　守くん、けっこうわかりやすいでござるよ。
守　（「ござる」につっこもうか迷って、やめて、）うん、なんか、いろいろ本とか見てもさ、いや、前からけっこう読んではいるんだけどね、その、病気とかについて。僕らは藁にもすがりたいからさ、希望のあること書いてる本は、普通だったらこんなの非科学的だろう、って投げるような本でもさ、信じちゃいたくなるんだよね。
琴子　そういうこともあるだろうねえ。（言い直して）あるんだろうでござる。
守　僕だってそうでさ、でも、ぎりぎり、わかるのよ。長いこと仕事とかして、社会に揉まれて、ある程度、それでもある程度だけどね、わかるようになってきたから、
琴子　うん。
守　でも、エミとかは、さ、（だまされちゃうんだよね）
琴子　ああ、
守　こないだそれでケンカになってさ、
琴子　そっか。
守　泣かせちゃったよ、エミのこと、
琴子　あれ、五歳から泣いたことなかったんじゃないの？（思わず「ござる」を忘れる）
守　うん、
琴子　え？
守　こないだまでの話なんだよね、それ、
琴子　そうか。
守　お父さんは冷たいよ、って言われたよ。
琴子　うん。
守　（何も言い返せないよ）なあ。
琴子　・・・そうでござるか。
守　・・・そうでござる。
琴子　冷たいってのじゃないんだけどね、
守　うん。
琴子　仲直りはしたでござるか？
守　一応ね。
琴子　ゆるしてくれたんだ。
守　部屋にこもっちゃったから、ドア越しに一時間くらい話しかけて、僕だって辛いけど、エビデンスとか、バイアスとかの話してさ、
琴子　それはなんかよくわかんないし興味ないけど、
守　えー、
琴子　優しい子じゃない？
守　うん。
琴子　優しい子でござるよ。エミちゃん。

守、腰を下ろす。

守　優しいのとか、意味ないもの。

琴子、うろうろし始める。

琴子　（呆れて）嫌なこと言うなー。
守　は、は、は、（笑ってみせるが、全然笑ってない）

琴子　嫌なこと言うでござるなー。二十歳くらいのめんどくさい青年みたいなこと言うでござるなー。
守　ねえ、だから、何なのよ、ござるってそれ。
琴子　やめるタイミングを見失ったでござる！
守　（呆れる）
琴子　（守を見て）辛気くさいおじさんでござるなー。
守　は、は、は、（笑ってみせるが、また全然笑ってない）
琴子　ハリセンボン！
守　え？
琴子　あ、「ん」だ。
守　え？
琴子　しりとり。
守　（守の真似をして）は、は、は、（守の真似をやめて）ハリセンボン
守　ああ、
琴子　しりとりしよう。
守　何？　急に、
琴子　真面目な話に飽きちゃった。
守　えー。

琴子、変な踊りを始める。

琴子　エクストリームしりとり。
守　何それ？
琴子　究極の、しりとり。
守　だから、何よ、それ？
琴子　どんなに長い単語でも、最後のたった一文字だけを 取っていくの。
守　（ちょっと考えて）普通のしりとりじゃないか。
琴子　ははは、うん。
守　何だ、それ、たーだそれっぽく説明してるだけじゃないか。
琴子　どうせ一人になったら、家に帰っても、仕事してても、真面目なこといっぱい考えるんでしょう？

琴子が変な踊りをしていることに守、気づく。

守　何？　その踊り、
琴子　え？
守　いや、今やってるそれ。
琴子　一緒にやる？
守　え？
琴子　見ながらなら簡単だよ。
守　え、
琴子　やってみなよ。
守　えー。（と、言いつつやる）あ、本当だ。なんか、できる。

ふたり、黙々と変な踊りを続ける。

琴子　(踊りを続けながら)わたし物覚えよくてさー。
守　(踊りを続けながら)なんだ、藪から棒に、
琴子　台詞覚えるのとかも、姉より早かったんだよね。姉は俳優だったのに。
守　それはそれは、
琴子　姉は悔しがってさー、
守　それはそうでしょう
琴子　さっきの歌も、わたしもう歌えるよ？
守　え？　嘘？
琴子　本当、本当。
守　すごいな。
琴子　あ。しりとりするんだった。
守　あ、しりとり？
琴子　り、り、リーマンショック。
守　・・・いきなりショックな単語が出てきた。
琴子　「ク」だよ、「ク」。
守　これ、もう僕参加してるの？
琴子　(秒針の口真似)チ、チ、チ、チ、チ、チ、チ、チ、
守　く、くま！
琴子　(簡単な単語に馬鹿にしたような顔で)マクスウェルーヘルツの電磁方程式。
守　何それ？
琴子　(はーん、わからないのか、という顔)「き」だよ、「き」
守　き、キング牧師。
琴子　シュレーディンガーの猫。
守　コアラ。
琴子　ラジオ・スターの悲劇。
守　き、木！
琴子　近似値。
守　(頭良さそうな単語を考えようとするが、)チャツネ。
琴子　ネルソン・マンデラ。
守　ラムネ。
琴子　寝顔。
守　お、親。
琴子　優しさ。
守　賽の河原。
琴子　らしさ。
守　寂しさ。
琴子　桜
守　…の樹の下には死体が埋まっている
琴子　しりとりって、そういうルールじゃないから。
守　(笑う)
琴子　やっぱり桜の樹の下には、でもいい？
守　いいよ。下には、は(「wa」と発音し)、は(「ha」と発音する)か。は、は、ハンダ。ハンダゴテ！
琴子　どっち？　ハンダ？　ハンダゴテ？
守　じゃあ、ハンダ。

琴子　ダニエル・ラドクリフ。
守　踏切。
琴子　利子。
守　獅子。
琴子　ショーシャンクの空に
守　ニール・ヤング
琴子　グッド・ウィル・ハンティング
守　グーグーだって猫である
琴子　ＬＵＮＡ　ＳＥＡ
守　シ、シーサイド
琴子　ドナドナ
守　納豆
琴子　ＵＮＯ
守　ノストラダムスの大・・・失敗。
琴子　・・・

守　（踊りをやめて）するだろう。ノストラダムスだって、大失敗くらい。
琴子　（踊りを続けながら）たとえば？
守　白い服に、カレーうどんの汁、はねて付けちゃったり、とか。
琴子　そうかあ。
守　お気に入りの、おろしたての服だったかも。
琴子　ノストラダムスでしょう？
守　うん。
琴子　世界の終末を予言した人でしょう？ スケール小さくない？
守　心のショックの大きさは、ほら、人それぞれだから。
琴子　あと、ノストラダムスのさ、あれ、ノストラダムスの時代と場所にカレーうどんなくない？
守　たとえば、だよ。
琴子　カレーもうどんもなくない？
守　だから、たとえばだよ。麻婆豆腐とかかもしれない。
琴子　麻婆豆腐もなくない？ 麻婆も豆腐もなくない？
守　じゃあ、ミートソースだったかもしれない。
琴子　（踊りをやめて）だいたいノストラダムスってどこのひとよ？
守　知らないよ。ヨーロッパのどこかじゃないの？
琴子　太ってたのかな？
守　え？
琴子　太ってたのかな、ノストラダムス。

ふたり、棒立ちのまま話し続ける。

守　知らないよ。なんで？
琴子　ん？
守　ノストラダムスの体重とかどうでもよくない？
琴子　守くん、
守　ん？
琴子　どうでもいいことなんて、この世界にひとつもないのよ。

守　んー、
琴子　（ドヤ顔）
守　そうかもしれないけど、
琴子　そうだよ
守　んー、
琴子　でも、
守　ん？
琴子　ノストラダムスの体重だけは、どうでもいっか。
守　・・・うん。
琴子　本人にとっては、大問題だったかもしれないけど、でも大昔に死んじゃった人だしね、
守　うん。
琴子　でも、やっぱり、太りすぎると膝に負担かかったりとか、ノストラダムスもいろいろ大変だよねえ。
守　あのさ、
琴子　ん？
守　あの、
琴子　うん、
守　ノストラダムス太ってたの？
琴子　え？　いや、だから知らないよ。
守　じゃあ、なんで、ノストラダムスが太ってた前提で話を進めるの？
琴子　え？
守　いや、どうでもいいことではあるんだけど、なんで太ってたことになってるのかなあ、って、
琴子　痩せてたの？
守　いや、知らないんだけど。
琴子　あ、終わっちゃったね。しりとり。途切れたのか。
守　ああ。
琴子　ノストラダムスの・・・からか。やり直す？

琴子、また踊ろうとする。

守　いいよ。僕の負けで。

琴子、踊りをやめる。

琴子　あ。投げ出した。
守　投げ出すも何も、たかがしりとりだからさ。
琴子　いいじゃない、しりとり。
守　いいんだけどさ。

琴子、腰を下ろす。
次いで、守も琴子の隣ではない場所に腰を下ろす。

守　・・・ダニエル・ラドクリフって何の人だっけ？
琴子　俳優さん。ハリー・ポッターとかやってた、
守　あーそっか。

琴子　エミちゃん幾つになったの？
守　今年、二十歳。
琴子　え、もう！
守　早いよなあ。
琴子　わたし、子供いないから全然わからないんだけど、え、生まれてから二十年経ったってこと？
守　それは子供いなくてもわかるでしょう？
琴子　いやいやいや、納得できない。
守　まだかろうじて十代だけどね、
琴子　へー。立派に育って。
守　そんな、見てもないのに、
琴子　立派に育ってないの？
守　立派に育ったけどさ。
琴子　ハナノちゃんは？　十歳くらい？
守　十七だよ。
琴子　もう十七？
守　エミが二十歳なんだから、（当然、）そのくらいになるでしょう。
琴子　それは、あれだね。
守　ん？
琴子　慣用句すぎて、あまり言いたくないけど、
守　うん、
琴子　わたしたちも歳をとるわけだね。
守　そういうことですよ。
琴子　へー。
守　みんな歳をとりましたよ。

遠くでパトカーの音。

琴子　あ、守くん、捕まえにきたよ。
守　あ、ほんとだ。悔しいなあ。もう少しシャバの空気を・・・っておい！　何もやってないよ！（立ち上がる）
琴子　（大ウケ）
守　（あまりのウケ具合にちょっと引いている）
琴子　はー、面白い。
守　そんなに？（腰をおろす）
琴子　子供たちの前でもそういうのやるの？
守　最近は、あんまり。
琴子　もうふたりとも大人だもんねえ。
守　まだまだ、って思うこともあるけどね。
琴子　立派に育って・・・
守　だから、見てもないのに、
琴子　でも、ふたりとも立派だよ。
守　（呆れて笑って）だから、見てもないのに、
琴子　いや、そうじゃなくて、エミちゃんやハナノちゃんじゃなくて、ああ、ふたりはふたりで立派なんだろうけど、守くんとカナコさん。
守　僕ら？

琴子　ふたりを育ててさ、
守　まあ、それはね、
琴子　がんばったよ。
守　僕はまあ、うん、わかんないけど、(カナコは)そうだね。
琴子　カナコさんも、立派だよ、今、
守　今？
琴子　不安とか苦しさとか、あまり見せないじゃない？
守　それ、立派なことなのかなあ。
琴子　立派なことって思ってあげようよ。

守、雲を見上げる。

守　僕だったらよかったのに。
琴子　・・・それ、
守　病気になるのがさ。
琴子　それ、カナコさんの前で絶対に言っちゃダメだからね。
守　・・・

守、顔を戻し、琴子の方をぼんやりと見る。

琴子　言ったら、殴るよ。

琴子、立ち上がる。

守　・・・
琴子　冷蔵庫とかで。
守　ん？
琴子　冷蔵庫とかで、殴るから。
守　・・・はははは、力持ち。
琴子　気は優しくて、力持ち。
守　え？
琴子　ん？
守　・・・死んじゃうよ。冷蔵庫なんかで殴られたら。カナコ、未亡人になっちゃうよ。
琴子　だから、未亡人にしないためにも、守くんはそういうこと言ったらだめだよ。
守　でもさ、
琴子　絶対、言ったらだめだよ？
守　それは、
琴子　すごい、悲しむから。それ、守くん、カナコさんのこと大切にしてるふりして、全然大切にできてないから。それ聞いたらカナコさん、すごい悲しむから。
守　そんなに、あんまり、決めつけないでよ。
琴子　・・・
守　言わないよ。

琴子、一回転する。

琴子　まーた真面目な話をしてしまった。
守　すまんなあ。
琴子　むずかしいものだね。ふざけ続けるのも。
守　ふざけ続けるような状況でもないからねえ。
琴子　こういうときに真面目になっちゃっても、意味とかないのにね。シリアスになることと暗くなることって、ほんとはちがうことなのにね。
守　そう？
琴子　そうじゃない？
守　(少し考えて)そうか。
琴子　もう、悲しいのか。
守　え？
琴子　いや、病気になるのが僕だったら、とか、言ってなくても、もう、悲しいのか。
守　悲しくて、悲しくて、とてもヤリイカ食べたい。
琴子　なんか、この先、人生でヤリイカ食べるたびにそれ思い出しちゃいそうだなあ。
守　ふふふ、
琴子　ダニエル・ラドクリフは元気にやってるのかなあ。
守　ハリー・ポッター？
琴子　うん。
守　カニクリームコロッケってけっきょくどうやってつくるの？
琴子　(適当すぎる仕草で説明しながら)こうやって、こうだよ。
守　ググりまーす。(見上げながら)・・・ここ風吹いてなくて、雲もあんまり動いてないのに、すっごい上空の雲だけ流れてるよ。
琴子　(見上げて)ああ、ほんとだ。
守　ハリー・ポッターのオーディションで最後まで残った子とかはさ、あれ、おれがやるかもしれなかったのに、とかずっと思うのかな？
琴子　思わないんじゃない？
守　え？
琴子　わかんないけどさ。そういうの思うの、案外、なんていうか、飽きるから。
守　そうか。

ふたり、しばらくそのまま空を見ている。
救急車の音が遠くで聞こえて、また聞こえなくなる。

守　僕さ、あの、学生の頃さ、
琴子　早く行ってあげなよ、カナコさんのところ。
守　人の話、遠慮なくぶった切ってくるね。
琴子　行ってあげなって。
守　いや、実は、今日、カナコ、診察とか、検査があってさ。
琴子　え、
守　僕が有休を今日とるって決まってから、なんか、予定が動いて、だから今日、二時過ぎくらいにならないと、会えないんだよね。
琴子　え、じゃあ、わたし、何しに呼ばれたの？
守　いや、僕の話し相手になるために。いつもと同じだよ？
琴子　え、わたし、会いに行くのにちょっと勇気がいるようなときに、その気持ちの準備的なもので呼ばれてるんだと思ってたんだけど、

守　そうだよ。
琴子　この、病院に面した広い公園の、散歩、
守　うん、いい散歩道だよね。
琴子　え？　なんで？　二時にならないと会えないのに、なんで十二時過ぎくらいから、わたしと守くんはここでグダグダしてるの？
守　二時に集合したら、そこからグダグダして気持ちの準備して、会いに行くの四時とか、そういう時間になっちゃうでしょう。だから、早めに集まって、早めに行きあぐねて、ちょうど気持ちの準備ができたくらいに、二時。
琴子　何、その、計画性。
守　計画性、大事。
琴子　ほんとに計画的なひとはひとりで来てさっさと会いに行くでしょう。
守　まあ、結果オーライってことで。誰も損してないし。
琴子　わたしは釈然としないよ。釈然としねーよ。
守　なんで言い直したの？
琴子　釈然としてない感じが、一回目はちょっと足りなかったから。
守　怒った？
琴子　（頭の中を点検して）そうでもないな。
守　よかった。
琴子　近所だからいいけど、
守　いつもわるいね、
琴子　いいけど。
守　もうすぐ一旦退院するでしょ？
琴子　カナコさん？
守　他にいないでしょう。
琴子　うん。
守　ウクレレ、一緒に弾こうと思って。
琴子　いいねえ。
守　カナコ、うまいんだよ、ウクレレ。
琴子　へー。弾くんだ。
守　僕は始めたの最近だから、何曲か弾き語りできるくらいだけど、
琴子　あ、でも何曲かはできるんだ。
守　できるよ。
琴子　オリジナル曲以外に？
守　オリジナルはさっきの一曲だけ。
琴子　何歌えるの？
守　えーとね、
琴子　うん、
守　え、これ、歌えってこと？
琴子　え？　いや、
守　おお、それは、緊張するなあ。
琴子　あ、歌うんだ。
守　ｏａｓｉｓとビリー・アイリッシュと、高田渡と、どれがいい？
琴子　ビリー・アイリッシュなんて歌えるの？
守　歌えません。
琴子　ｏａｓｉｓは、

守　歌えません。
琴子　じゃあなんで訊いたの。
守　(チューニングをして)いや、ちょっと、かっこいいじゃない？ここでｏａｓｉｓとかビリー・アイリッシュ歌えたら、
琴子　でも歌えないんでしょう？
守　うん。
琴子　じゃあ高田渡しかないじゃん。
守　オッケー。高田渡ね。
琴子　なんか、釈然としないけど、あ、釈然としねーけど、うん。
守　それでは、系図、という曲を。

系図

作詞：三木卓　作曲：高田渡

ぼくがこの世にやって来た夜
おふくろはめちゃくちゃに
うれしがり
おやじはうろたえて
質屋に走り
それから酒屋をたたきおこした

その酒を飲み終るやいなや
おやじはいっしょうけんめい
ねじりはちまき
死ぬほど働いて
死ぬほど働いて
その通りくたばった

くたばってからというもの
こんどはおふくろが
いっしょうけんめい
後家のはぎしり
後家のはぎしり
がんばって
ぼくはごらんの通り

ひのえ馬のおふくろは
おふくろはことし60才
おやじをまいらせた
昔の美少女は
すごく太って元気がいいが

じつはせんだって
ぼくにも娘ができた
女房はめちゃくちゃに

うれしがり
ぼくはうろたえて
質屋に走り
それから酒屋を
たたきおこしたのだ

ぼくがこの世にやって来た夜
おふくろはめちゃくちゃに
うれしがり
おやじはうろたえて
質屋に走り
それから酒屋をたたきおこした

（「系図」『東京午前三時―三木卓詩集』（思潮社・１９６６））

琴子　（拍手）なんか、時代を感じるけど、いい歌ね。
守　これをね、
琴子　うん、
守　これを高田渡が歌ってて、後に高田渡の息子の高田漣もミュージシャンになって、カバーして歌ってて、
琴子　へー。
守　それが、すごくいいんだよ。
琴子　いいねえ。
守　いい話だよねえ。
琴子　高田渡とか、
守　ん？
琴子　高田渡とか、好きだったんだ。
守　うん。
琴子　知らなかった。
守　話したことなかったかもね。
琴子　聞いたことなかった気がする。
守　そっか。
琴子　付き合いが長くても知らないことってあるねえ。
守　ふふふ、
琴子　へー。
守　あのさ、
琴子　ん？
守　あのー、
琴子　何？
守　あれ、あの、
琴子　何？
守　言いたいことが、
琴子　何よ？
守　ちょっと、トイレ行ってくる。

琴子　え、あ、そう。
守　うん。
琴子　いってらっしゃい。

守、立ち上がり、トイレへ（退場）。
琴子、立ち上がり、うろうろして、客席の方を向き、喋り出す。

琴子　昔々あるところに、コーヒーショップがありました。駅前の、何の変哲もない、と言っていいような、ちょっとお洒落な、テイクアウトとかをしているようなお店です。そこで働いていた女性は、コーヒーを売る仕事が心から好きでした。毎日の中の、小さなリラックスのひとときを提供することに誇りを持っていました。彼女は素敵でした。彼女自身が、彼女がコーヒーに対して思い描くリラックスのひとときのような人でした。
常連に、無愛想な青年がいました。あまりに無愛想なので、嫌われてるのかな、と思うくらいでした。
ところが、ある大雪の日、警報が出て誰もどこにも出かけないような日曜の朝に彼女が店にいると、その無愛想な青年が雪まみれでやってきました。驚いた彼女が「こんな大雪の日にコーヒー一杯のために来たんですか」と言うと青年は「こんな大雪の日にまでコーヒーを売っている人が売っているのは、コーヒー一杯だけじゃないと思うんです」と答えました。そこで彼女ははじめて、いつも彼女が売りたかったものを彼がわかって買ってくれていたことに気づいたのでした。
そしてふたりは・・・

これは、守くんとカナコさんの馴れ初めの話、ではありません。守くんは、あのひと、無愛想だった時期とかありません。
あ、わたしの話でもありません。
ただの、伝え聞いた、ちょっと素敵風な、だけのいい話です。
守くんも、わたしも、それぞれの相手と知り合ったきっかけも、つきあったきっかけも、全然、なんか、普通で、話されても困るくらいに、なんてことのない話で、だから、今話したふたりの話みたいに、何かドラマがあるわけじゃありません。
何が言いたいかというと、あの、べつに、ないんだけど、言いたいこととか。ないんですけど、何が言いたいかというと、素敵なエピソードとか、ドラマチックな出来事に彩られていなくても、律儀に日々は続きますよねえ、みたいな。
カナコさんが亡くなったら。守くんはカナコさんがいないとだめな人です。なので、だから、たぶん、だめになると思います。でも、だめでも、娘たちとか、他の家族とか、友人知人とかも、いて、だから、だめなりに生きていくんですよね。
やっていけないはずなのに、やっていけてしまうことを、何て言えばいいんでしょうね。
わたしは、守くんを見ていて、今から、もう、悲しいです。
さっき話してた、姉の、コココーラの話の、続き、というか、おまけ、ですけど、わたしは、あれから、姉のお葬式の後から、コカコーラを飲むたびに、ほんの少し、ちゃんとじゃないんですけど、少し、姉を思い出すようになりました。今では、いちいち、悲しい、とか思わないんですけど。
これも、一種の追悼なんでしょうか。

守　やー。

守、帰ってくる。両手に飲み物。

琴子　おかえり。
守　何してたの？
琴子　べつに、何も。
守　そう。あ、飲み物買ってきたよ。
琴子　あ、コカコーラ。
守　ね。
琴子　ありがとう。
守　どっちがいい？（と言いながら、ふざけて片方のコーラを振る）
琴子　んー、こっちかな。（と、振っていないほうのコーラをとる）
守　（少し抵抗するが、案外素直に振っていないコーラを渡して）ほい。
琴子　でも飲む前に、わたしもちょっとトイレ。
守　あ、うん、行ってらっしゃい。

琴子、トイレへ（退場）。
守、遠くを見てじっとしている。
救急車の音が聞こえ、止まる。
遊具に座り、俯いてウクレレを爪弾き、ちょっとだけ、鼻歌。

守　（顔を上げ、客席に向かって）これは、僕が子供の頃の話なんですけど、

琴子　ただいまー。
守　早いな。
琴子　そう？
守　いや、うん、わかんないけど、
琴子　戻ってこない方がよかった？
守　いや、うん、平気だけど、
琴子　何かしてた？
守　ああ、あの、ちょっと、思い出しごとを、
琴子　思い出しごと？
守　あー、そんな言葉はないか。なんて言うんだ？　思い出？　と、考えごと？　の間みたいな。
琴子　ああ。
守　うん。
琴子　何の思い出しごとしてたの？（ベンチに座る）あ、いただきます。（コーラを開ける）
守　あ、僕も（と飲もうとするが）、振っちゃったから開けられないや（遊具に座る）

ふたり、笑い、琴子だけコーラを飲む。

守　子供の頃にさ、近所に髭も髪もモッサモサのおじさんがいたのよ、
琴子　うん、
守　ちょっと怖くてさ、
琴子　おお。
守　よく公園でお酒飲んでてさ、生きてんのか死んでんのかわかんない感じでベンチにうなだれてたりすることもあって、

琴子　それは、うん、
守　子供だからさ、怖かったんだよね。
琴子　わかるよ。
守　でも、ある日、何か落とし物して、何だったか忘れちゃったけど、ずっとひとりで探してたらそのおじさんが声かけてきて、
琴子　え、
守　なんか僕はもう、半ベソだったんだけど。何探してたか忘れたけど、
琴子　うん。
守　一緒に探してくれたんだよね。
琴子　そっか。
守　うん。
琴子　見つかったの？
守　忘れちゃった。でも、反省した。
琴子　うん。
守　そのおじさん、普段さ、大きい道を渡って酒屋に行こうとしてさ、でもゆっくりしか歩けないから、車は止まって、おじさんが酒買いに出かけるたびにちょっとした渋滞になってたりして、迷惑だねえ。
琴子　うん。それで、僕とかも、近所だから、たまに会うんだけど、何もしてないのに睨まれたりとか、何見てんだ！って怒鳴られたりしてたからさ、僕まだ子供だよ？ すごい嫌でさ、
守　そりゃあ、嫌でしょう。
琴子　うん。すごい嫌だった。でも、その一件で親切にされたから、なんか見方が変わったよ。
守　ほう。
琴子　その後話すことも、たぶんなかったんだけどね。
守　うん。
琴子　でも、しばらくしたら、近所にもうひとりモッサモサのおじさんがいることに気づいてさ、渋滞起こしたりしてるのと、僕に怒鳴ったりしてるのと、一緒に落とし物探してくれたのと、どのおじさんがどっちだったのかわからなくてさ、
琴子　ん？
守　モッサモサってボロボロの服って以上の情報に興味なかったから、同じ人だと思い込んでたけど、ふたりいたんだよね。
琴子　え？ うん。
守　いい人と迷惑な人な人がいたのか、混じってたのか、人間だから混じってるって言い方は変か。
琴子　・・・
守　これ、あれ、なんでこの話しようとしてたんだっけ？
琴子　いや、知らないよ。
守　まあ、いっか。
琴子　・・・
守　・・・
琴子　え、これで終わり？
守　何が？
琴子　この話。
守　あ、うん。
琴子　えー。なんか、なんかないの？ もっと、なんか、
守　え。うん。モッサモサのおじさんが実はふたりいた！ って驚きじゃない？
琴子　もうちょっと上手に話してよ。

守　そう？
琴子　そう？ってのもおかしいでしょう。
守　そうかなあ。

ふたり、どちらからともなく立ち上がり、入れ替わって座る。
その間も会話は続く。

琴子　そうだよ。途中いい話かと思っちゃったよ。
守　いい話じゃない？
琴子　もう、なんか、よくわかんないよ。
守　・・・そういえば友達にさ、
琴子　あれ、別の話？
守　あ、うん。地元の話したら、思い出しちゃって、
琴子　あー、うん。
守　地元の友達に、実家が工場やってるってやつがいてね、
琴子　うん。
守　何作ってんの？って気になるじゃない。
琴子　そうかな。そうかもね。
守　で、聞いたの。そうしたらさ、なんか、あの、飛行機を、
琴子　え、飛行機？
守　あ、いや、飛行機の、
琴子　おお！
守　荷物を乗せるところに、
琴子　おお。
守　手を届かせるために、背がたりない、キャビンアテンダントが乗る踏み台の、
琴子　おお？
守　その台に使われてる、バネを作ってるって、
琴子　小さ・・・
守　え？
琴子　飛行機から始まって、すごい小さい。話が。
守　職業に貴賤なしですよ？
琴子　そうなんだけど、
守　大事だよ、バネ。
琴子　大事だろうけど。
守　まあ、でも、その話を聞いたとき、笑ったよね。
琴子　守くんも笑ったんじゃない。
守　最初からバネって言えよ、って言って。
琴子　そうだよ。
守　そいつ学校の、番長だったんだけど、
琴子　さっきからほんとにいろいろよくわかんないな。

守、また空を見る。琴子、飲み物の原材料などの表示を読む。

守　そういえば、カナコがさ、盲学校で働いてたときに、
琴子　ああ、もう何十年も前だ。

守　うん、最近、急に思い出した。カナコから聞いた話なんだけどね、
琴子　うん、今度こそちゃんとした話を(頼むぞ)。
守　盲学校の子たちってさ、やっぱりというか、目が見えない分、他の感覚がすっごい発達しているらしくって、遠くからの足音とか、体臭で、誰がどこにいる、とか、かなり正確にわかるんだって。
琴子　そうなんだ。
守　すれちがったりして、ナントカ先生こんにちは、みたいな挨拶して、まず相手を間違うことはないし、曲がり角の向こうに誰がいるかわかったり、もう、状況によっては見えてる人より見えてるんじゃない？ってくらいなんだってさ。
琴子　そういうこと(も)あるだろうねえ。
守　それで、あるとき、お寺で合宿みたいなことがあって、カナコも付き添いで行って、まあ、お寺だからさ、夜とか暗いじゃない？
琴子　うん。
守　それで、夜中に生徒の一人が起きて、トイレに行きたい、って言うから、カナコは先生だから、その子と一緒にトイレに行って、その子がトイレに入ってる間、トイレの外で待ってて、
琴子　うん、
守　暗いし、古いお寺だし、なんかちょっと不気味だなあ、って思って、早く部屋に帰りたいなあ、って思って、それで、その子がトイレから出てきてね、そしたら、
琴子　え？
守　その子、誰もいない暗がりに向かって「誰がいますか？」って、
琴子　うわ。
守　「誰が」って訊くってことは、その子の知らない人なわけよ、知ってる人なら必ずわかるから、それで、カナコ、あわててその子を連れて部屋に戻ったって。
琴子　守くん。
守　ん？
琴子　怖い話するときは怖い話するって言ってよ！
守　(そうしたほうがいいよ)ねえ。
琴子　ねえ、じゃないよ。うわ、怖い。それ。もう、
守　怖いよねえ。
琴子　あのね、なんでスチュワーデスの踏み台のバネから、そんな、急に怖い話になるの？
守　今どきはスチュワーデスじゃなくて、キャビンアテンダントだよ。
琴子　どっちでもいいよ。
守　大事なことだよ。
琴子　大事なことかもしれないけどさ。まったく。
守　でも、最初に聞いたときは、めっちゃ怖い！って思っただけだったけど、今は、なんか、いい話なんじゃないかな、と思ってさ、(と言いながら立ち上がり、うろうろしながら話す)
琴子　どこが、
守　いや、なんか、自分たちが気づけてないだけで、もうひとつの世界がここにある、的な感じ。
琴子　そんなこと言ったら大抵の怖い話がそうじゃん。
守　たしかに。
琴子　まず、自分のいる世界を大事にしろよ。
守　一理あるねえ。
琴子　カナコさんのところ行かなくていいの？
守　もうちょっとかかるってさ。さっき、トイレ行ったとき見たら、ラインきてた。
琴子　あっそう。

守　こんな、小さな機械で、メッセージをやりとりできるような時代になっちゃって。
琴子　もう何十年も前からでしょう。
守　すごい時代ですなあ。
琴子　何言ってるの、ジジくさい。
守　ジジイになりたいねえ。
琴子　もうジジイなんじゃないの？
守　ジジイと、ババアになりたい。
琴子　・・・
守　カナコと、
琴子　・・・うん。
守　ごめん、こんなこと言われても困るよね。

守、しゃがむ。

琴子　そうねえ。
守　だよねえ。（と、言いながら、しゃがんだままゆっくりと一回転する。このとき、靴紐をさりげなく少し緩めておく）
琴子　困るよ。
守　ねえ。
琴子　（笑いながら）ふざけるな。
守　（つられて笑う）
琴子　でも、言いたいなら、聞くよ？
守　・・・
琴子　・・・あれ、泣く？
守　今なら、その気になれば三十秒くらいで泣けるかな。
琴子　いいよ。
守　その気になればね、

守、立ち上がり、琴子のそばに行き、遊具に寄りかかる。

守　僕も、ほら、こんなんだけど、一家の大黒柱だからさ、
琴子　うわー、古い考え。
守　ジジイだねえ。
琴子　ジジイだねえ。
守　でも、まあ、一応、大黒柱だからさ、弱音は、娘たちの前では、吐かないようにね、しているわけですよ。
琴子　そうかー。
守　会社では、まあ、ここ数年はこれでもずいぶんやりやすくなったけど、中間管理職的な立場でね、
琴子　中間管理職って久しぶりに聞いたよ。
守　上司にも部下にも、弱みを見せられず、
琴子　靴紐またほどけてるよ。
守　（見て）ほんとだ。
琴子　そんなこと考えながら働いてるの？
守　考えながら、っていうより、習慣かな。だから、でも、なんていうかさ、こういう弱音って、ね、

琴子　うん。
守　吐き方が、よくわかんない。
琴子　そうか。

守、見えない一本の線の上を歩く。
靴紐はほどけたまま。
その一本の線の上を行ったりきたりしながら話す。

琴子　結びなよ。
守　やだ。
琴子　なんで・・・
守　・・・ちょっと、錯乱するには、タイミング逃してるっていうかさ。すごく悲しいことが起こることは確定してるのに、それで、それがどんなタイミングで訪れるかも、だいたい、わかってるのに、もっと言っちゃうと、自分や、カナコが、そこに至るまで、そこに至ったとき、どんな気持ちになるかまで、予想できるのよ。
琴子　すごいね。
守　最近、そんなことばっかり考えちゃうからね。カナコの気持ちも、考えて、それで、たぶん、たぶんというか、もう、しょうがないからさ、あきらめるわけじゃないけど、でも、
琴子　うん、
守　すっごい、すっごい、嫌だけど、別れは、くるからさ、
琴子　そうだね。
守　そこに向けて、そこに向けるわけじゃないけど、みんなでなるべく幸せに過ごせるようにしたほうがいいじゃない？ それで、僕ら、実際、そうしてるし、

守、立ち止まる。

琴子　うん。
守　カナコも、みんなが幸せそうにしてる方が、きっとうれしいじゃない？
琴子　うん。
守　だから、僕の周りに起きてること、今、この瞬間も、何ひとつ、悲しいことなんか、ないんだ。
琴子　うん。
守　（急に大きな声で）リピート、アフター、ミー！
琴子　え？
守　何ひとつ、悲しいことなんか、ないんだ。

琴子、守が大きい声を出すので、周りを見回して誰かの迷惑になってないか伺う。
守は琴子をじっと見ている。

琴子　・・・何ひとつ、悲しいことなんか、ないんだ。
守　何ひとつ、悲しいことなんか、ないけど、
琴子　何ひとつ、悲しいことなんか、ないけど、
守　悲しくないけど、ヤリイカ食べたい！
琴子　（え、という表情をするが、）悲しくないけど、ヤリイカ食べたい！
守　ヤリイカ食べたい！
琴子　ヤリイカ食べたい！

守　日本酒飲んで、ヤリイカ食べたい！
琴子　日本酒飲んで、（首を傾げながら）ヤリイカ食べたい！
守　（ため息）
琴子　すっきりした？
守　しない。
琴子　しないんかーい。
守　（そうつっこみたくもなるよ）ねえ。
琴子　泣く？
守　泣かない。
琴子　その気になれば泣く？
守　その気になれば十秒くらいで泣くかなあ。

守、遊具に座る。
琴子はそれを見ている。

琴子　その気になれば、って言う奴がその気になった試しはないんだよ。
守　（笑う）
琴子　（守がすっきりしていないことに）まあなんていうか、そうだよね。
守　ん、
琴子　守くんは昔から頭でっかちさんだよね。
守　僕は昔から頭でっかちさんだよね。
琴子　しりとりでもする？
守　しりとりはもういいよ。
琴子　楽しいのに。
守　楽しいけどさ、
琴子　楽しいことした方がいいよ。
守　うん、
琴子　靴紐結びなよ。
守　うん（見るが、結ばない）
琴子　結ばないの？
守　なんか、夢の話をしてよ。
琴子　夢？
守　さっき、僕がしてた、水の入った箱を運んでる夢、みたいな、
琴子　でも、人の夢の話ってつまんないって言わない？
守　え？そう？
琴子　わかんないけど、
守　僕のさっきの話も、じゃあ、ひょっとしてつまんなかった？
琴子　いや、あれは、なんか、参加型だったから、よかった。
守　ああ。ならよかった。
琴子　うん。
守　それで？
琴子　え？

守、立ち、琴子のそばに行き、座る。

守　しないの？夢の話。
琴子　いや、でも、つまんなくない？
守　僕は面白く聞くから、大丈夫。
琴子　すごい自信だなあ。
守　大丈夫、面白いから。
琴子　話すのわたしなのに、
守　どうぞ。
琴子　最近何かあったかなあ。あ。
守　お、あった？
琴子　わたし、ジェダイでね、
守　ん？
琴子　ジェダイ。スターウォーズの。わたし、夢の中で、ジェダイで、
守　うん。
琴子　ライトセーバー失くしちゃって、すごい怒られてる、っていう夢見たよ。
守　ああ。
琴子　うん。
守　ああ、うん。

ふたり、なんか、もじもじする。

琴子　ごめん、わたしが、あれね。わるかった。
守　いや、あの、ごめん。ごめん。
琴子　えーと、
守　あの、ちょっと、歩く？
琴子　うん。でも靴紐結んで。
守　えー。
琴子　結んで。
守　わかった。

ふたり、守が靴紐を結ぶ間に琴子は立ち上がる。
ゆっくり歩き出す。
守もすぐ立ち上がり、琴子の後ろを歩き出す。
縦になって歩く。
以下の会話は、歩きながら、

琴子　あ、あった。最近の印象的な夢。
守　うん、どうぞ。
琴子　ずっと、屋根裏なのかな。屋根裏みたいなところで、ノートをめくってて、
守　ノート？
琴子　ノート。小さい窓から明かりが差し込んで、何冊も、時間をかけて、ずっとノートを見てい
て、ノートの内容はあんまり覚えていなくて、たぶんずっと同じ内容か、ほとんど変化がない
感じなんだけどね、
守　うん。
琴子　窓からの明かりが、ずっと、ゆっくり、変わり続けるの。やわらかかったり、冷んやりしてた
り、まぶしかったり、薄暗かったり、

守　ああ、
琴子　何もないんだけど、そういう夢。
守　それは、なんか、いいね。
琴子　でしょう？
守　うん、それは、いい夢だねえ。
琴子　うん。
守　さっきの、水の入った箱の夢の他にもね、
琴子　うん、
守　他にも、僕、実は、よく見る夢が、いくつもあって、
琴子　いくつもあるのか。
守　いくつもあるのよ。
琴子　どんなの？
守　（話そうとするが、）いいや、
琴子　え？
守　いいや、話さなくて。
琴子　何それ。
守　水の箱の夢だけ覚えといて。
琴子　え、忘れちゃうよ。
守　忘れちゃってもいいけどね、
琴子　よく見る夢とかってさ、性格とか関係あるのかなあ。
守　ありそうだけど、こういうので、なんか、判断されるのも嫌だよねえ。
琴子　ネガティブ思考です、とか。
守　ああ。
琴子　過去の間違いを認められない傾向があります、とか。
守　ああ。
琴子　頑固にも程があります、とか。
守　ん。
琴子　愛想振りまいときゃなんとかなると思ってるんです、とか。
守　誰のことを言ってるの。
琴子　いや、べつに誰でもないけど、
守　えー。えー。
琴子　いや、本当に、本当に。
守　まあいいか。
琴子　でも、それで診断みたいなことをされるのは嫌だけどさ、物事っていうか、あらゆることに、出るよね。性格。
守　そりゃあ、まあ、出るでしょうね。
琴子　こわくない？
守　こわいといえば、こわい。

ふたり、少し離れて、腰を下ろす。

琴子　守くんは、ほら、歌を歌うのとかさ、っていうか、作るのとかさ。
守　ああ、あんまり考えたことなかったけど、言われてみれば、それはそうかもしれないね。深層心理みたいなのが、
琴子　バレバレですよー、みたいなのが、

守　でも、ほら、僕、カナコにしか聞かせるつもりないからさ。
琴子　熱いねえ。
守　はっはっは。
琴子　わたし聞いちゃってるけどね。
守　あ。
琴子　はっはっは。
守　本当だ。
琴子　分析しましょうか？
守　やめてよ。
琴子　（歌い出す）雨のふーるー
守　うわ、
琴子　日ーにはー、
守　うわうわ、
琴子　でもこの曲好きよ、わたし。
守　よく覚えてるね。
琴子　覚えたよって言ったじゃない？
守　言ったけどさ、本当に一回で覚えられるもの？
琴子　うーん、実際にそうなんだから、そういうもの、としか、
守　それ、なんか、大変じゃない？
琴子　何が？
守　ぜんぶ覚えちゃうって、疲れそう。
琴子　ぜんぶじゃないよ？
守　ぜんぶじゃないのか。
琴子　さっきのは、ほら、集中して聞いてたから。
守　それは。どうも。ありがとうございます。
琴子　いえいえ。
守　でも、本当に覚えててびっくりした。
琴子　これ、どういうつもりで作ったの？
守　え？
琴子　この、避雷針の歌？
守　避雷針の気持ちになって、
琴子　何？ 避雷針の気持ちって、
守　雷を、待ってる？
琴子　避雷針って雷を待ってるんだ・・・
守　待ってるっていうかさ、本来の目的は雷雲立ち込めるときにしかないけど、圧倒的な待ち時間の長さをね、思って、
琴子　待ち時間、
守　昔、住んでた家のことを思い出して、庭にアロエがあってさ、
琴子　アロエ、
守　うん、最初、その、アロエの気持ちになって、アロエの歌を作ろうとしてたんだけどね、前半は、実はその名残がずいぶん残ってるんだけど、
琴子　いいじゃない。素敵じゃない。アロエの歌。
守　途中からヨーグルトの歌になっちゃって。
琴子　アロエヨーグルトか。
守　これはだめだな、って。

琴子　ＣＭソングのつもりで作れば？
守　カナコにオリジナルのＣＭソング、アロエヨーグルトの、聞かせる、って、それ夫としてどういう気持ちよ？
琴子　それもそうか。
守　それもそうだよ。
琴子　それで？
守　それで、でも、昔の家の何かが、妖精的な感じになって会いにきてくれるっていうストーリーは、僕の中にあって、
琴子　そこは譲れなかったのね？
守　譲れなかったね。
琴子　謎のこだわり、って気もするけどね。
守　クリエーションってそういうものでしょう。
琴子　そういうものなの？
守　そういうものなの。それで、襖とか、床とか、ドアノブとか、いろいろ考えていったら、いつも町や人を見守ってる、避雷針、なんかいいな、って。
琴子　ああ。
守　どんな日も、立って、危険を引き受けるために、立ってるでしょう？ かっこいいじゃない？
琴子　そこまでの思い入れは、歌からはわからなかったけど、うん、そうだね。言われてみれば、
守　まあ、嘘だけど、
琴子　えー。
守　最初から、なんか適当に思いついて、避雷針の歌のつもりで作ったんだけどね、
琴子　ほんとかなあ。
守　ん？
琴子　今の一連の話の流れは、ぜんぶ嘘？
守　いやー、でもまあ、正直、半々かな。
琴子　半々って何よ？
守　なんか、でも、かっこよくない？ 避雷針。
琴子　今の説明を聞くと、かっこいいような気もする。
守　なんか、おなかへってきちゃったなあ。
琴子　お昼食べてないの？
守　遅い朝ごはんを食べて、そのまま。
琴子　それじゃあ、そろそろ、空腹か。
守　そろそろ、空腹です。
琴子　病院の食堂で何か食べたら？
守　そうしようかなあ。
琴子　食べたら、そろそろちょうどいい時間なんじゃない？
守　たぶんそうだねえ。
琴子　ウクレレと歌、カナコさんに聞かせるの？
守　もちろん。
琴子　がんばれー。

守、立ち上がる。うろうろする。しばらくうろうろする。

守　楽しみだなあ。緊張するけど、楽しみだなあ。
琴子　でも、べつに上手く歌えたからどう、とか、そういうのでもないでしょう？

守　そうね。逆に、上手すぎたら、ちょっと引くよね。
琴子　引きはしないと思うけど、
守　いきなり井上陽水みたいに歌い出したら、
琴子　それはちょっと引くかも、
守　琴子さん一緒に来る？
琴子　行かないよ。
守　べつに来てもいいよ？
琴子　今日は、いいよ。わたし守くんが来れない日とかにひとりでけっこう会いに来てるし、
守　そうなの？
琴子　そうだよ。聞いてない？
守　そういえば言ってたかも。
琴子　ちゃんと聞いてあげて。
守　いや、聞いてるんだけどさ、琴子さんのことは、わりと、どうでもいいかなと思って、忘れちゃったのかな。
琴子　おい。
守　はっはっ。
琴子　そういうのよくないよ。
守　こういうのよくないよねえ。
琴子　まあ、いいけど。
守　いいんだ。
琴子　いいよ、べつに。
守　よくないよ。
琴子　どっちだよ。
守　（今日一番くらいの真面目な口調で）よくないよ。ダメだよ。
琴子　（笑いながら）何に怒ってるの。

琴子、立ち上がる。伸びをする。

守　いやあ、でも、
琴子　ん？
守　本当に、いつもありがとう。
琴子　何？
守　言っておこうかと思って。
琴子　いいよ、そういうの。それ言われたらわたしも何か言ったほうがいいみたいな空気になるよ。
守　そう？
琴子　そうだよ。
守　言ってもいいよ？

琴子、座り、守から目を逸らす。

琴子　言わない。
守　言わないんだ。
琴子　言えばいいってものでもないでしょう。
守　そうか。
琴子　そうだよ。

守　ふうん。
琴子　でも、カナコさんには、言いたいことといいなね？
守　うん。
琴子　でも言わないほうがいいことは言わないように気をつけなよ？
守　むずかしいなあ。
琴子　むずかしいんだよ。
守　ふうむ。
琴子　むずかしいけどさ、
守　わかってるよ。
琴子　うん。
守　うん。
琴子　ねえ。
守　ん？
琴子　もう一回、聞かせて、さっきの歌。
守　え？
琴子　避雷針の歌。ほら、

守、琴子の隣に座る。
ウクレレとりだす。

守　♪（さっきふざけて歌った歌）
琴子　ちがーう。
守　はっはっは。待って、チューニングする。
琴子　どうぞ。
守　（チューニングしながら）あのさあ、
琴子　ん？
守　今日、
琴子　うん、
守　いい天気だよねえ。
琴子　そうね。過ごしやすくて、
守　いい日だなあ。
琴子　うん。
守　日常って簡単にさー、
琴子　そうだね。
守　（笑って）まだ話してる途中だよ。
琴子　でも、わかるよ。
守　うん。
琴子　でもさ、
守　うん、
琴子　日常は、どうなっちゃっても、日常だよ。
守　今も？
琴子　うん。
守　ひび入ってても？
琴子　うん。
守　日常なのか。

琴子　幸か不幸か、日常だよ。靴紐だって、ほどけたら結ぶし、

守、一瞬チューニングをやめて靴紐を見て、ほどけていないことを確認する。

琴子　（守の目線を追って）ね。
守　（チューニングが）できた。
琴子　一緒に歌っていい？
守　いいよ。
琴子　途中から。
守　途中からなんだ。
琴子　サビから。
守　（ちょっと考えて）あの曲、どこがサビだ？
琴子　わたしが歌ったところがサビだよ。
守　かっこいいな。
琴子　わたし、かっこいいんだよ。
守　（笑って）じゃあいくよ。

避雷針

雨の降る日には雨に濡れる
雲のない日には陽に照らされる
風の吹く日には揺れている
何もない日にはただそこにいる

（ここから琴子も歌い出す）

僕のこと、忘れていいよ
でも、なかったことにはしないでね
僕は君の昔の家の、避雷針

（守、演奏をやめないで続きを歌う。琴子はちょっと驚いてそれを見ている）

どんな天気の日でもただそこにいるよ

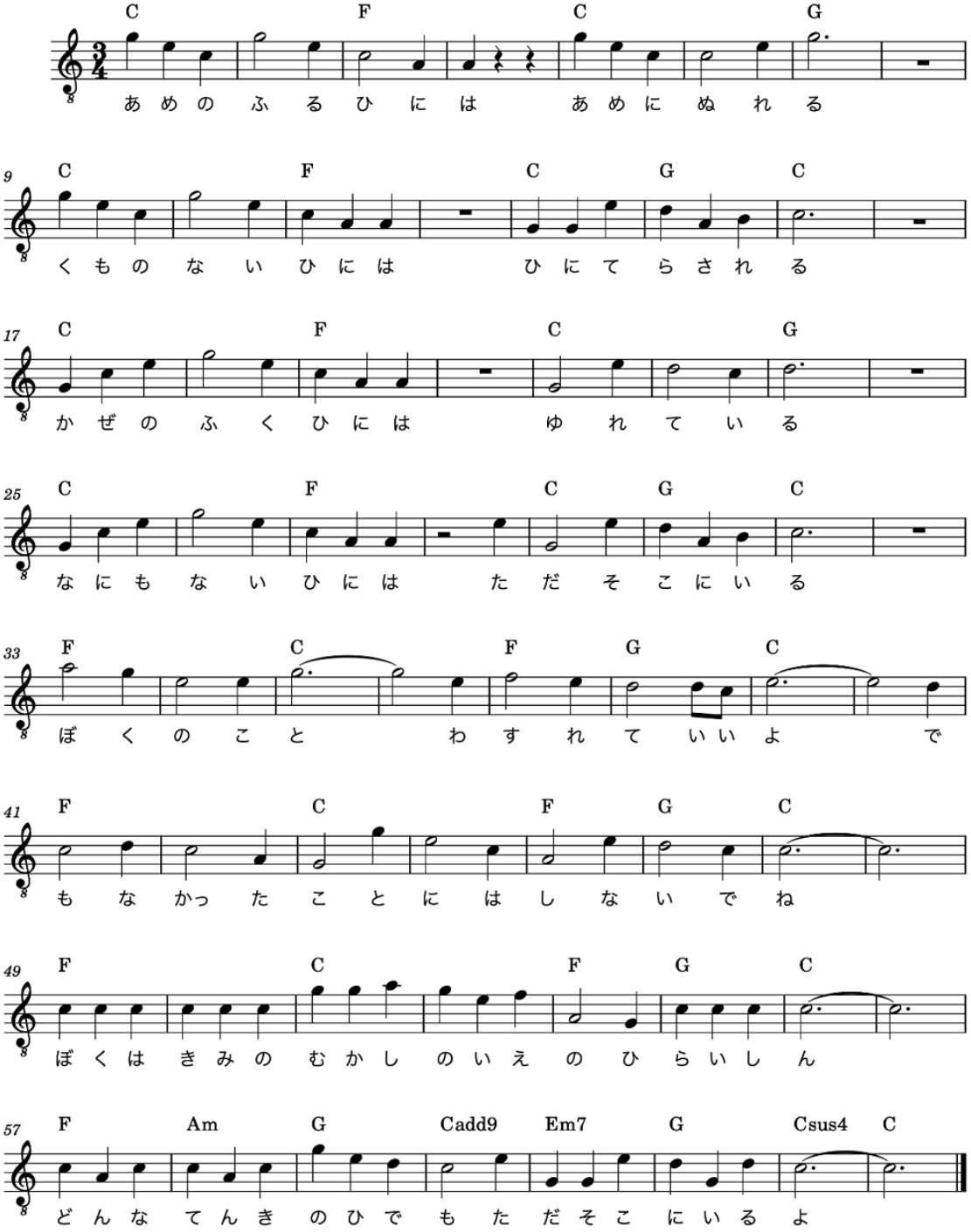
守、何故か、上を向く。
琴子も視線を追うように上を向く。

琴子　（上を向いたまま）ねえ。
守　（上を向いたまま）ん？
琴子　これ、本当は、何の歌？
守　んー？　何の歌でもないんじゃない？
琴子　泣くの？
守　今なら、一秒で泣きそう。
琴子　・・・早く、行ってあげなよ。
守　行ってあげる、とかじゃなくてさ、

琴子　うん、
守　たーだ行くんだよ。
琴子　うん。
守　うん。

終

避雷針の歌


C F C G
あめのふるひには あめにぬれる
9 C F C G C
くものないひには ひにてらされる
17 C F C G
かぜのふくひには ゆれている
25 C F C G C
なにもないひには ただそこにいる
33 F C F G C
ぼくのことわすれていいよで
41 F C F G C
もなかったことにはしないでね
49 F C F G C
ぼくはきみのむかしのいえのひらいしん
57 F Am G Cadd9 Em7 G Csus4 C
どんなてんきのひでもただそこにいるよ

本作品の著作権は、作者である荒悠平に帰属します。
上演許可などのお問い合わせは、本作を上演した団体「コココーララボ」まで。
上演をする際は有料無料に関わらず、必ずご連絡ください。

コココーララボ WEB https://co-co-co-la.wixsite.com/cococola
MAIL 18cococola@gmail.com

また、劇中歌唱している「系図」の著作権は、作詞者 三木卓、作曲者 高田渡に帰属します。
上演の際は各著作権所有者にご確認ください。

「系図」 作詞:三木卓 作曲:高田渡
「系図」『東京午前三時―三木卓詩集』(思潮社・１９６６)